

小さな町の図書館の学校支援サービス

西川町立図書館（山形県）

1 はじめに

西川町は山形県のほぼ中央部に位置しており、磐梯朝日国立公園の朝日連峰や月山と、その支脈に囲まれている。町を貫流している寒河江川沿いとその支流沿いに約7千人が生活している。

図書館は昭和50年に西川町開発センター内に開館した。蔵書数は約3万冊である。

2 学校支援サービス

(1) 巡回文庫

図書館にひとりで来館できる子どもたちはほんのわずかである。そこで、待っている図書館から子どもたちの身近な図書館として出向く図書館サービス「巡回文庫」を始めた。

町内には小学校が8校ある。全ての小学校に毎月ブックコンテナに本を並べ、公用車に積み込み、学校が準備する場所に運び込み、子どもたちに直接本を貸出す方法である。

先生方も一緒に子どもたちに本を薦めたり、声をかけたり、和気藹々とした雰囲気貸出しを行っている。

10～15分の短い時間だが、子どもたちが心に残る本と出合っほしい、そして世の中の不思議なことを知る楽しさを知ってほしいと続けている事業である。

「地球温暖化について調べたい」とか「サンショウウオの生態を知りたい」などレファレンスにも勿論応じている。即答はできないので図書館に戻ってから対応している。

貸出し終了後、職員室で先生方とのコミュニケーションも大変効果がある。

- ・スイミーの授業でレオ・レオーニのいろんな本を紹介したいので探してほしい
- ・本を紹介しあう授業があるがブックトークのやり方を指導してほしい
- ・昔の道を子どもたちと歩きたいが古い道路がわかる地図がどこかにないだろうか

・西川町の炭生産高の移り変わりを調べたいので資料がほしい

などと、直接顔を見ながらいろんな要望や相談にのれることはとってもいい機会である。

町の資料で対応できれば一番いいのだが、少ない蔵書ではままならず、資料がない場合は山形県立図書館に問い合わせ調べてもらう。図書館間相互協力を利用しすぐ資料を送っていただけるので大変助かっている。

また、県立図書館で対応できないときには、近隣の図書館や国立国会図書館までも問い合わせ、満足してもらえるように対応している。

(2) 図書主任との会議

学校図書館と町立図書館の連携を図り、本好きな子どもに育つように、毎年1回学校の図書主任と町立図書館職員の情報交換や研修を行っている。一堂に会して話し合いをすることで、相互の理解・連携がスムーズに図られている。

学校で発行する文集・学校計画・学校だよりなどの寄贈依頼もこの席上お願いしている。この資料がレファレンスには欠かせない図書館の財産となっている。

(3) 読み聞かせボランティアの養成

学校朝読書がどこでも盛んに行われているが、わが町でも全校で実施している。読み聞かせボランティアのメンバーが年々増え、読み聞かせ研修会の情報提供や学校に持って行く本を選ぶアドバイスをしている。ボランティア同士の交流が図られるようにも努めている。

3 おわりに

どんなに小さな図書館でも一人一人にひとつひとつ丁寧に応対し、「図書館に問い合わせで良かった」と言ってもらえるように「小さな図書館でも大きなサービスを」モットーにこれからも努めていきたい。

(佐藤京子)

将来の図書館利用者・セルフファレンサーを育てる

品川区立図書館（東京都）

1 学校図書館整備の背景

学校における読書環境整備は、ここ数年の間に「学校図書館法」改正による司書教諭配置、「子どもの読書に関する法律」の公布などにより一見良くなってきた。

しかし、いまの学校図書館は、魅力的な本がない、児童生徒が利用する時間に閉まっている、授業にあまり活用されていないなど本来、学校図書館の持つべき「読書センター」や「学習情報センター」の役割を十分に果たせていないのが現状である。

品川区では平成 17 年に「品川区子ども読書活動推進計画」において、学校図書館を自主的な子どもの読書活動の拠点と位置付けた。

品川区立図書館は従来から学校への団体貸出、ブックトーク等の読書支援などをおこなってきたが、公共図書館が蓄積した図書館運営のノウハウと資料を活かして学校図書館の整備と支援をしていくことになった。

2 学校図書館整備の内容

そこで、品川区では品川図書館内に、学校図書館サポート担当（平成 17 年度 1 名・平成 18 年度 3 名）を設置し、以下の事業と支援を開始した。

(1) 専任の学校図書館運営スタッフの配置

週 2 日程度、民間事業者やNPO法人に委託し、学校図書館に運営スタッフを配置した。

運営スタッフは、図書の貸出・返却、登録、整理のほか児童生徒への読書アドバイスや学習情報の収集・提供、教師と連携して授業のサポートなどをおこなう。また、学校図書館で解決しなかったレファレンスや学校図書館運営などに関して、公共図書館が相談を受ける体制づくりをすすめている。

(2) 区立図書館とのネットワーク化

学校図書館に学校図書館システムを導入し区立図書館システムとの連携ネットワーク化をはかった。これにより学校図書館の端末で区立図書館や他の学校図書館にある資料も検索することが可能となった。

また、ネットワーク化とともに物流体制を整えることで豊富な区立図書館資料を学校に取り寄せて授業などで活用できる体制を整えた。

(3) 蔵書構築支援

魅力的な学校図書館資料を構築する為、蔵書構築支援をおこなう。

学校図書館の場合、最初に何十年分もの図書を捨てることから始まるため、除籍のガイドラインの作成や実際の作業支援、また購入のための資料情報の提供をおこなっている。

(4) ボランティア養成・支援

学校図書館で活動するボランティアの支援としてボランティア養成講座を企画運営している。ボランティア登録は直接学校でもらうが、公共図書館が養成講座を運営することで、ボランティアとのつながりが深まるという面も持ち合わせている。

3 学校図書館整備の課題と将来像

学校図書館を整備する為には、公共図書館と学校組織のみならず、ボランティア、教育委員会各部署等とも連携をしなければならない。

この連携がこの事業の一番重要且つ困難な面でもあるが、このことにより、公立図書館の守備範囲が広がり、存在価値を高めることができる。

また、学校図書館が整備され、子どもたちが読書習慣とセルフファレンス能力を身につける場所となれば、公共図書館は将来の図書館利用者を手に入れることができるようになる。

そしてなによりも、この整備事業によって、子どもたちにとって読書がよりいっそう身近で楽しいものになればと考えている。（内藤寿子）

学校図書館へのレファレンスサービスについて

白山市立松任図書館（石川県）

1 はじめに

(1) 白山市の概要

白山市は、平成 17 年 2 月 1 日に 1 市 2 町 5 村（松任市、美川町、鶴来町、河内村、吉野谷村、鳥越村、尾口村、白峰村）の合併により誕生した。市域を形成する 8 地域は、県都金沢市の南西部に位置し、白山国立公園や、県内最大の流域を誇る手取川（一級河川）、日本海など山・川・海の豊かな自然に恵まれた地域である。海岸部から山間部までの標高差はおよそ 2,700m あり、県内最大の面積と第 2 の人口規模を有する都市となっている。

(2) 白山市立松任図書館の概要

当館は、平成 14 年 10 月に、コンサートホール、児童館を併設した複合施設「松任市学習センター（現・白山市松任学習センター）」内にて新館オープンした。旧施設に比べて約 6 倍の面積（約 4,800 m²）となった館内には、地域の学校図書館活動を支援するための場として「学校図書館支援室」（約 84 m²）ならびに同室専用「書庫」（約 100 m²）を備えている。

2 学校図書館司書の配置状況

白山市における学校図書館司書の配置は、平成 9 年 4 月の旧・松任市地域の試行的配置（小学校 1 校、中学校 4 校）にはじまり、翌年の平成 10 年には同地域内全小中学校（小学校 9 校、中学校 4 校）へ正規の専任司書が配置された。その後、他地域（美川町、鶴来町、鳥越村）でも段階的に配置され、市町村合併後の平成 17 年 4 月には山間部の小中学校併設校 4 校への配置を最後に白山市内の全小中学校（小学校 16 校、中学校 8 校、小中併設校 4 校）すべてに学校図書館司書が配置され現在に至っている。

3 学校図書館への支援

団体貸出やリクエスト、レファレンスの受付な

ど、資料提供面に係るサービスや学校図書館支援室の整備（会議用テーブル席や連絡棚など）を行っている。学校図書館支援担当職員は児童サービス担当職員 3 名が兼任（うち 1 名は正規職員）。

4 学校図書館へのレファレンスサービス

調べ学習テーマに関する資料を特定できない場合の調査依頼をファックスにて受け付けしている（専用書式有り）。平成 16 年度受付数は 38 件（小学校 26 件、中学校 12 件、すべて松任地域内小中学校分）。

5 現況ならびに問題点

当館では、学校図書館における調べ学習活動を資料提供面にて支援するため、館内に整備した学校図書館支援室書庫に調べ学習用の資料を約 4,200 冊収蔵している。収蔵資料の選定については学校図書館司書からの要望を取り入れつつ、当館職員が学校からの過去のレファレンスを参考にしている。調べ学習用の貸出は長期間であるため、なるべく学校図書館支援室書庫内資料のみにて対応したいところではあるが、「環境問題」や「社会福祉」関係など、毎年のようにレファレンスのあるものについてはあらかじめ収集していた資料で間に合っても、テーマによっては該当資料が一般閲覧室のものでしか用意できない場合がある。また、現在でも学校間において調べ学習テーマが同時期に重なるという問題もあり、学校とのさらなる連絡、調整が必要である。

6 おわりに

松任地域では、学校図書館司書の配置開始より 9 年目に入り、多くの児童、生徒は学校図書館司書の存在ならびに日常的な開館を常態と感じている。白山市となった今後も、市立図書館と学校図書館はそれぞれの設置目的や任務などを踏まえつつ、子どもたちの情報収集活動の支援ならびに読書環境整備のための連携を進めていかなければならない。

（林 美紀）

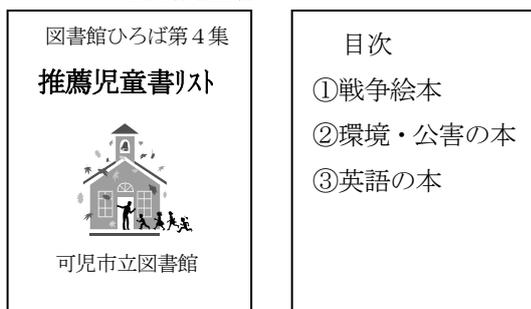
「推薦児童書リスト」と
“パック詰サービス”による学校支援
可児市立図書館（岐阜県）

1 はじめに

当館では、児童生徒からの問い合わせは、夏休み自由研究や修学旅行、調べ学習等多数あるが、学校への支援は殆ど無い状態であった。

そんな中、学校図書館をはるかに越える蔵書冊数を活用してもらおうと、「推薦児童書リスト」を作成して、市内の小学校へ配布してきた。同時に、ブックトークで紹介したい優れた児童書を子ども達のそばに置いて、読んで欲しいという願いを込め、団体貸出“パック詰サービス”を開始した。

(推薦児童書リスト)



2 推薦児童書リスト

(1) 内容

冊子には厳選した図書を掲載している。子どもの興味を引き出し易い点に留意し、絵本中心の内容になっている。また、学年別の推薦児童書、調べ学習やテーマ別に利用できそうな児童書など約1,000冊を、予め分野別にリストアップしてある。冊子のサイズはA4版50頁である。

(2) 配布の方法

平成15年度から、市内10校の小学校の各学年用に冊子を配布し、平成16年度には、学校訪問をしたり、校長会や教頭会に出向いて冊子の説明をした。その結果、小学校の全クラスの担任向けに冊子を配布することになった。

- ① 小学校や図書館のブック・トーク時
- ② 図書館の体験学習の中高生
- ③ 図書館見学の小学生
- ④ ボランティア講座の受講者

⑤ 希望する来館者

3 パック詰サービス

(1) 仕組み

分野別コースの番号や、「戦争の絵本を借りたい」と連絡すれば、“パック詰サービス”として選書され、図書館の専用箱に用意される仕組みになっている。

小学校に限っては、月1回、市内全小学校へ巡回する移動図書館を利用して、本の貸出・返却ができるようになっている。

(2) 利用状況

平成17年度は、小学校9校、小学校併設児童クラブ8、児童センター1館の18団体で、貸出冊数は、2月末現在、1,206冊である。

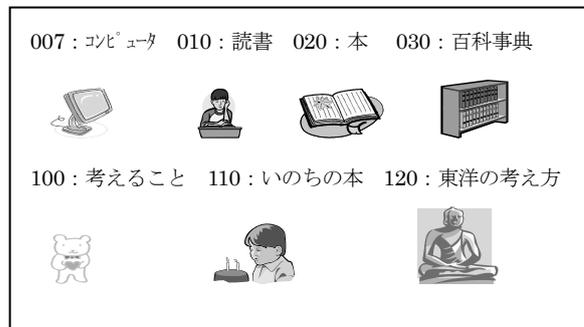
4 絵で覚える本の100分類

児童生徒向けのレファレンス用ツールとして、平成15年度から、図書館独自の「絵で覚える本の100分類」を作成している。

この分類表は、小中学生自らが、資料検索ができるようになることを期待して作られたものである。A3サイズの紙に100の分類とその内容に合わせたイラストカットを入れた資料である。

これを使用する際は、補足説明をする必要があるので、学校訪問時や体験学習で来館した児童生徒に図書館員が直接配布している。

(絵で覚える本の100分類)



学校との連携は困難ではあるが、できることからやっていく、これしかないのかもしれない。

(石黒啓子)

読書指導員を介した学校図書室と 公共図書館との連携 南丹市立中央図書館（京都府）

1 南丹市の概要

平成18年1月1日、京都府のほぼ中央に位置する、園部・日吉・八木・美山4町の合併により南丹市が誕生した。今回のレポートの対象となるのは、旧園部町の中央図書館での取組である。

2 読書指導員とは

表題の「読書指導員」とは、旧園部町（以下園部）において、使われる呼称である。

その職務内容は、司書教諭を補助する存在であり、教育委員会がその委嘱を行っている。

平成14年から始めた取組は現在、小学校5名、中学校1名、計6名の読書指導員が稼働しているが、その勤務時間は各々の学校規模により違いはあるものの、16年度実績で1校当たり年間約500時間（平均4時間/日）となっている。

職務内容は、学校図書室内の資料整理・レファレンス・室内の飾りつけ・絵本の読み聞かせ・ブックトークや授業の補助から委員会活動の支援まで読書活動に係る全般に及ぶ。

また、16年の夏休み期間中には、子どもたちの夏休みの自由研究を支援する目的で、中央図書館の利用案内冊子を作成し園部のすべての小学生に配布、併せて6名の読書指導員が交代で中央図書館にて「自由研究相談員」として、その支援に当たった。これら夏休み期間中の一連の取組に対し、図書館の学校主催『第8回図書館を使った“調べる”学習賞コンクール』の公共図書館部門で優良賞を受賞した。

3 読書指導員の有効性

(1) 読書量の増大

まず、取組後2年で全ての学校での読書量が平均して2倍以上に膨れ上がった。それまでの殺風景で無人に近い学校図書室に、季節感のある飾り付けがなされ、読書相談のできる「人」が存在す

ることへの安心感。そして、勤務後も公共図書館に立ち寄って、子どもたちからのレファレンスに応えようとする読書指導員の姿勢が導いた結果だと考える。

(2) 連携と共有

学校図書室と公共図書館とが有機的に連携することは、容易なことではない。

学校教育と社会教育との領域の違いからも、その目的・奉仕対象・内容など共に交わりきれない部分が存在する。

しかし、読書指導員が存在することで、両者の溝を埋める大きな役割を果たしていると考えられる。学校図書室と公共図書館との図書資料の物流のみならず、時には学校間の物流も担い図書資料の資源共有に大きく貢献している。

また、図書館資料に係る学校の授業・宿題等の情報も読書指導員を介して共有することが可能であるため、選書時の参考となり、また限られた資料を学校間で効率よく団体貸出ができる点などは大きなメリットと言える。そして何よりも、学校の中で、常に読書推進に向けた取組を続ける「人」がいることが、読書活動啓発の大きな核となる。

4 これからの公共図書館としての責務

今後の公共図書館には、個性が必要であると考えられる。勿論、公共図書館に求められるのは、万人に対しての公共性である。しかし、単に利用者を図書館のカウンターで待ち続けることが図書館職員の職務であろうか。

積極的な取組を展開して利用者増大を図り、その事を盾として資料費を獲得することが、利用者サービスの観点からも図書館職員の責務であると考えられる。今こそ、図書館職員が利用者を獲得するためのアプローチの方策に知恵を絞り、様々な形態での営業活動を行う時代ではないかと考える。

（大西敏之）

学校図書館支援

斐川町立図書館（島根県）

1 斐川町立図書館の概要

斐川町立図書館は平成 15 年 10 月 1 日に開館、今年(平成 18 年)10 月で満 3 年目を迎える。職員体制は、課長職の館長(司書)と係長・副主任(司書)・主事 2 名(司書)に臨時職員 9 名(司書有資格者)の 14 名である。この臨時職員 9 名のうち 3 名を学校図書館へ派遣している。

2 学校図書館との連携の目的

図書館準備室 1 年目(平成 12 年)に策定した「斐川町図書館建設基本計画」から学校図書館との連携を模索し始めた。

学校図書館に人(学校司書)が常に居る事こそがその学校図書館を楽しく生き生きさせ、子どもたちの利用で溢れ返るようになる源である。

3 連携の具体的な内容

(1) 学校司書の派遣

平成 14 年度から学校図書館のモデル校と位置づけ 1 つの小学校から派遣を開始した。現在は文部科学省「学校図書館資源共有ネットワーク推進事業」も活用し、全小学校 4 校と 1 中学校に派遣している。残り 1 つの中学校には今年 4 月に派遣する計画であり、スタートして 5 年目に全校配置が完成する。

(2) 学校図書館への団体貸出し

学校司書と図書館の学校図書館支援担当の司書が情報交換と連絡を取り合い、特に調べ学習用の図書などは学校間で調整をとりながら貸出しを行っている。

(3) 学校図書館連携システムとオンライン・ネットワーク

学校図書館のサーバーは図書館で管理している。平成 13 年度から 3 ヶ年の文部科学省「学校図書館資源共有型モデル地域事業」を活用し学校図書の全データ化と連携システムの開発を行い、16 年度から再び同事業の指定を受け、各学校図書館のホ

ームページと歴史教育などに活用できる古い地域の画像を今年度末までにアップする予定である。

(4) 学校図書費の予算計上と会計処理

学校司書の派遣を開始した平成 14 度からは図書館が学校図書費の予算と会計処理を担当するように変更した。会計処理は学校図書館支援担当の司書が行っている。

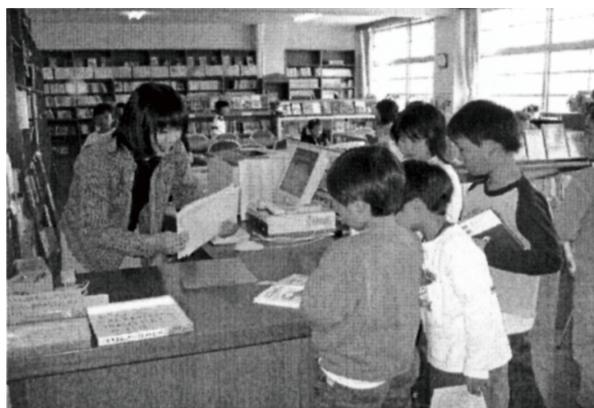
4 連携支援の成果

学校司書がいる各学校図書館の利用状況は、10,000 冊から 20,000 冊の貸出しになっている。冊数の違いは生徒数の違いでありどの学校でも学校図書館は活気に満ちている。教師や学校図書館からのレファレンスは件数としてはまだ少ない。これは、教師も含めて図書館を使いこなしていないことによると思う。リクエストや総合学習・授業への対応としての貸出しが圧倒的に多い。また、ブックトークやストーリーテリングなどによる読書普及活動を求められることが多くなってきた。

5 今後の問題

学校図書館や公共図書館の効果的な活用方法を児童・生徒たち、さらに教師にも広めていく必要を感じている。学校を訪問したり、図書館へ招待したりして行っていくことを学校司書とともに実施したい。

(白根一夫)



児童たちと友だちになることから仕事がスタートします。(中部小学校図書館にて)

学校図書館向けサービスについて

さぬき市図書館（香川県）

1 はじめに

さぬき市は平成14年4月1日、香川県大川郡の津田町、大川町、志度町、寒川町および長尾町の5町が合併してできた市である。面積は約158k㎡で、人口は約55,000人。合併前に寒川町立図書館が既にあり、合併後の平成15年、旧志度地区に新しく図書館ができ、それぞれがさぬき市寒川図書館、さぬき市志度図書館としてさぬき市の図書館サービスを行っている。寒川図書館の蔵書数は約2万冊、志度図書館は約3万冊と、どちらも小規模の図書館で移動図書館車もなく市内全域へのサービスにまで手が回らないのが現状である。

さぬき市内の小学校は14校と1分校、中学校は6校あり、まずはこの学校図書館への図書館サービスを通じて、さぬき市内の児童・生徒への全域サービスもできたらというのが、この学校図書館向けサービスを始めるきっかけのひとつである。

2 学校図書館向けサービス

さぬき市図書館の学校図書館向けサービスは、団体貸出を利用した資料提供サービスである。

利用できるサービスはふたつあり、「総合的な学習など調べ学習用の資料として」利用する場合と希望する一定期間・一定数の図書資料を学校内に置いて読書のきっかけとする「文庫」としての利用である。

ひとつめのサービスを利用するには、図書館指定の申込書を使いファックスで申込をしてもらった後、翌日図書館より回答をし提供資料の確認を行った後、資料の配送を行う。申込書には依頼事項、利用する児童の学年、いつまでに必要か、用意したい本はあるか、学校で準備済みの本はあるかなどを記入するようになっている。

ふたつめの文庫として資料を利用する場合には、図書館側が選書・配送を行う方法と、担任が来館し、選書・配送を行う方法がある。

どちらのサービスも基本的には、申込1件につ

き期間は30日まで、冊数は50冊までとしているが、申込みをした担任と相談をし、日数や冊数の調整をしている。

業務の分担は、申込の受付から資料準備までを依頼を受けた各館が行い、配送については寒川図書館が行う。また返却資料の回収も希望に応じて行っている。利用した担任からは、資料提供はもちろんだが資料の配送があることも喜ばれている。

平成17年度2月末現在、学校図書館向けサービスを利用した学校数は小学校のみで8校、貸出した資料数は383冊でまだまだ気軽に利用されている状況とは言いがたいが、利用する側からの意見や希望を取り入れながら、より利用しやすいシステムを考え、サービスのPRも行う必要がある。

3 調べ学習用資料の課題

調べ学習用として資料を用意する場合、「盲導犬の本」「春の絵本」「角野栄子さんの本」など単純なテーマであれば用意をするのも簡単であるが、「命の大切さについてかかれたもの」や「くらしのアイデアについて」などのテーマは授業の進め方によって用意する資料が違ってくるため、担任とのコミュニケーションがより重要である。だが担任の方でも忙しい仕事の合間をぬっての連絡であるし、寒川・志度図書館の職員数はそれぞれ常時2名と4名のため、館内業務も行いながら申込のあったテーマや資料について所蔵調査を行い、資料の準備、配送などを行うため人的時間的な余裕がないのが現状である。しかしながら学習を深めるための効果的な資料提供を行うためには担任とのより良い関係が不可欠であろう。

4 今後の課題

今後は図書館のホームページを立ち上げる予定もあり、ホームページで提供するOPACを含めての資料提供のかたちを考えたい。

さらに資料提供以外にも、学校からの図書館見学の受入や、学校でのおはなし会やブックトークなどでも学校図書館への支援を目指していきたい。

(六車智穂)